

Quatre Saisons de l'Europe

ヨーロッパの四季 I

饗庭孝男 文と写真



東京書籍

ヨーロッパの四季

II

饗庭孝男

文と写真

東京書籍

●同じ著者によって

『石と光の思想—ヨーロッパで考えたこと—』(勁草書房)

『自然・制度・想像力』(小沢書店)

『幻想の伝統—世紀末象徴主義—』(筑摩書房)

『中世の〈光〉—ロマネスクの建築と精神—』(青土社)

『ヨーロッパ中世の旅』(グラフィック社)

『西欧と愛』(小沢書店)

『恩寵の音楽』(音楽之友社)

『ヨーロッパとは何か』(小沢書店)

『幻想の都市—ヨーロッパ文化の象徴的空間—』(新潮社)

『批評と表現—近代日本文学の「私」—』(文藝春秋)

『経験と超越—日本近代の思考—』(小沢書店)

『小林秀雄とその時代』(文藝春秋)

『喚起する織物—私小説と日本の心性—』(小沢書店)

『日本近代の世紀末』(文藝春秋)

他多数

●現在 文芸評論家, 甲南女子大学文学部教授 フランス文学, 美術専攻

ヨーロッパの四季 II

1992年11月8日 第1刷発行

文と写真

饗庭孝男

発行者

小高民雄

発行所

東京書籍株式会社

東京都台東区台東1-5-18 〒110

営業03・3942・4111/編集03・3942・4173

印刷・製本

東京書籍印刷株式会社

©Takao Aeba 1992. Printed in Japan

乱丁・落丁の場合はお取替いたします。

ISBN4-487-79094-8 C0098

NDC901.4

¥1600

ヨーロッパの四季

II



目次

ハプスブルクの都

ウィーンとモーツァルト

8

ザルツカンマーグートの〈夏〉

2 1

チロルの秋

2 9

ドロミティの高原

4 4

北のスラヴへ

プラハの遠い昔と今

5 0

ベルトラムカ山荘で

6 0

夕陽のワルシャワ

6 4

アイルランド芸術紀行

ケルズの書

7 8

グレンダールロックの〈緑〉

8 7

先史の丘

9 5

アラン島の〈幸福〉

1 0 4

ロンドンデリーの歌

118

イエイツトリサデル館

126

カタルーニアの中世

イベリア、立ち昇る魂

138

ロマネスクの旅

143

二つの廃墟

152

ピカソ「青の時代」

158



ヨーロッパの降誕祭

179

● あとがき

188

● 地図

190

ヨーロッパの四季

II



1. Schuberttring

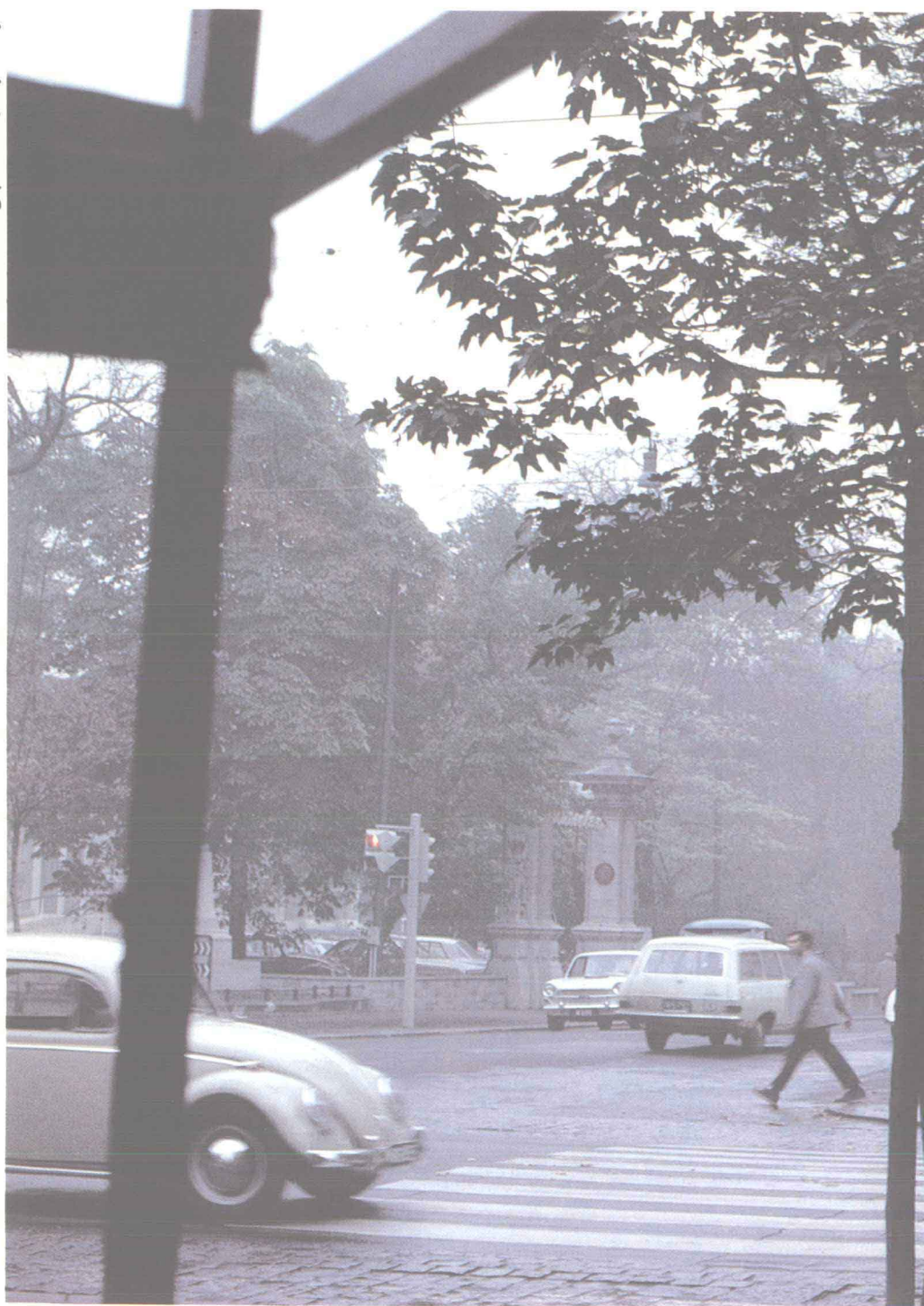
1. Schuberttring

SCHUBERT
UMWELT

bis Dezember 1967

am 1. Nov. 1967

Freitag 9 bis 13 Uhr



ウィーンとモーツァルト

このところ私は毎年のようにウィーンに來ている。パリとは趣が異なるが、心の落着く町である。かつてはよく汽車で西駅に着いた。パリとウィーンは汽車で十五時間、一日に一本通っている。西駅に着くと西ヨーロッパをはるばる横切つて、半ばスラヴ圏内に入つたという印象を与える。ザルツブルクから東へ向うにつれて、風景のなかにチェッコスロヴァキアやポーランドで見うけるような大きな農家や倉庫が牧場の間に見うけられるからである。窓の花々も少なくなってくる。

またあちこちに見られるロシア正教風の教会裝飾を眺めていると、他方でビザンチン圏に入つたとも感じられる。一方、不思議なことに北から入る暗いフランツ・ヨーゼフ駅に着くと、スラヴ圏から、西ヨーロッパの文化圏に帰つてきたという感じがつよい。このことは、結果としてウィーンが完全に西欧でも東欧でもなく、また宗教がカトリックとしても、必ずしもイタリアやフランスのようなラテン的性格をもたず、ゲルマンとスラヴにビザンチン文化の混融する複合的な性格をもっていることを意味しよう。

ハプスブルク帝国の、たとえばモーツァルトのいた時代、北イタリアはこの帝国に属していた。

考えてみれば山一つ越えようと、もうイタリアであり、バロックの時代、もつとも直接的に、しかも早くこの様式がウィーンにローマからもたらされたのである。ウィーンのなかでもつとも美しいバロックの教会はカールス教会であるが、それはローマに留学していたエルラッハの手になるものであり、ヘーレン通りにあるダウ・キンスキイ宮もまた館（まね）としてもつとも見事であるが、これもローマに留学していたヒルデブランドがつくったものである。

だが一方、ウィーンのロシア正教の教会を眺めると、やはりスラヴの印象をつよくし、さらに西欧と東欧のいづれにもいるユダヤ人のシナゴグを見ると、あらためてウィーンの複雑さに気づいてしまう。「世紀末」のクリムトが、美術史美術館の正面階段をのぼり、ふりむいた天井に近い壁に描いた絵はヘレニズム的だが、ベルヴェデーレ宮にある『抱擁』以下の多くの絵は、明らかにビザンチンであり、遠近法よりは金箔を用いた装飾性のつよいものである。だからクリムト一人にも、そうしたウィーン文化の複合的性格の出現を見る思いがする。

それはともかく、ウィーンに入る印象はさまざまなのだ。最近パリから飛行機で来るため、空港から石油化学の工場群を左に見ながら町に入り、ドナウ運河にかかるアスベルン橋を渡って環状道路（グ）に入ってくると、ああ、また、ウィーンにきた、という思いがする。

このところは常宿をケルントナー通りの入口、オペラ座の前のホテル・ブリストルにきめていたので、すぐに着く。このホテルは十九世紀の終り、つまり「世紀末」につくられたもので、一階にウィーン料理の、重厚でありながら繊細な味わいをみせる「コロソ」がある。その暖炉の両側に「ねじり柱」があるが、これはバロック教会建築で祭壇の両側にあり、中近東からきた「絹



カールス教会



ウィーンの辻馬車

のねじり柱」を模したものである。大理石でできていて美しい。

入口の次が客間^{サロン}で、夕方になるとピアノ演奏がある。二階に「シルク」という、オペラ座に面した瀟洒^{せうしや}な料理店があり、秋から冬にかけてオペラ座へゆく改まった服装の人々が、夕暮れ、三々五々歩いてゆくのをしながら食事をするには恰好の場所である。ここ数年間で外も内もほぼ完全に改装された。私は最上階のオペラ座に面した部屋によく泊まるが、部屋が三つあり、昔風に改装され、家具、油絵、ユーゲントシュテール（アール・ヌーヴォー）ふうの椅子や机、燭台があり、仕事をするにも落着いて言うところがない。

ケルトナー通りから一本右に入った所には「サン・カルロ」というイタリア料理店があり、宿から近いので、夕方はよくそこにたべにゆく。前にのべたようにウィーンとイタリアは歴史的にも距離的にも密接にかかわっているから、イタリア料理店があちこちにあっても少しも不思議ではない。

私は美術史美術館や自然史博物館、それに本屋や音楽会に行ったりして疲れると、よく午後に、王宮庭園の北西、環状道路の門に近い並木の蔭にある人気ない芝生へ行った。

鞆を枕に、緑の草に埋れて何時間も眠ったり、休憩したりしている。放し飼いの犬が顔の傍らまでやってくる。私の動物好きを知っているのか猫までやってくるから不思議だ。青草に臥している、日本の多忙な生活が夢のように思われ、幻のように遠ざかってゆく。

疲れを回復すると、私は立ち上ってフォルクス庭園に広がる薔薇園のなかを歩く。木立の間から国会議事堂や、遠くベルギー・フランドル様式の市庁舎の塔が見える。それから一隅にあるカ

フエにすわり、深い木蔭の間から遠くの径を行き来する人々を眺め、とりとめのない「内面」の声に耳を傾けるものであった。ウィーンに在る無為の、しかし何と美しく豊かな時間……。

私はまたミヒャエル広場からアウグステイナー通りを下りて来て、角に近い美術関係の店に入る。ここは古い版画を多く売っていて有名だ。私はホテル・ブリストルの中二階の廊下にある「古きウィーン」の版画と同じものを見つけてそれを買ったりする。

ウィーンの町は旧市街や入り組んだ小路はあるが覚えやすく、歩きやすい。たとえばブルク劇場からヘーレン通りへ出、その貴族的な趣のある通りを下り、バロックのこの町に「装飾は犯罪だ」という刺激的な言葉とともに無装飾な建物を建てたアドルフ・ロースの思い出を左に、ミヒャエル広場から華麗なコールマルクト、グラーベンの通りを歩き、シュテファン大聖堂からフィガロハウス（モーツァルト記念館）を経て、応用美術博物館まで、ほぼ小一時間もあれば歩くことができるのである。つまり環状道路の円を横切る形となる。環状道路の西のわきにはオペラ座から北へ、一八五〇年代から、城壁を除去したあとに、美術史美術館、自然史博物館、民主政治発祥のギリシヤにあやかった国会議事堂や、市民共同体の理想と見たベルギー、ブリュッセルの建物を模した市庁舎や、ブルク劇場、ルネサンスの学問を目指したイタリア風のウィーン大学等が次々と建てられた。したがってこのウィーンの「近代」から、王宮、シュテファン大聖堂と、「文化」、「王政」、「宗教」の象徴を歩くことになる。いわば時代を逆に遡るのである。

この「公」がつくった「近代」の背後に、それと並行して高級官僚やグラン・ブルジョワ、大学教授らの身分、階級をそれぞれに反映する「私」の壮麗な آپルトマンが建てられたのである。

したがってそれらはウィーンの心性の「近代」的中心が、王宮と貴族、宗教の聖職者をグループとする旧市街に對峙していると言つてよい。

だが、他方、ウィーン「世紀末」がこのような都市に別のアクセントをおく。その中心がバロックのカールス教会と広場をはさんで向い合う「分離派」^{セツション}の会館である。さらにオットー・ワグナーがつくつた地下駅のビザンチン風の建物がその間にある。クリムトが描いた会館内のペーラーヴェン・フリーズは、美と醜惡をまぜた意図ばかりが目につく力強いものであるが、ワグナーの建てた東の環状道路沿いに近い郵便貯金会館は、実用性と機能性をそなえた現実主義の優れた建物である。内部にはホフマンの家具も展示されているが、しかし、環状道路西側の「公」の歴史様式の「近代」性に対し、ワグナーは身分的構造の建て方を排して平等の原則にしたがい、かつまたアルミを多用して歴史様式の重い石造建築を越えたものをつくつたと言つてよい。

それはさらにノイシュティフト通り、リンケ・ウィーンツアイレ通りの建物にいつそうあざやかにあらわれる。かつてのバロックの精華がカールス教会に象徴されたとすれば、オットー・ワグナーのウィーン十四区にあるニードーエスタライヒ州立精神病院附属教会（アム・シュタインホフ）は、まさにそれと對比されるべき、「近代」の「聖なる建物」であろう。ともにルネサンス風の円屋根をいただきながら、バロックと「世紀末」という二つの時代にあざやかに自らの存在を示してみせたウィーンの象徴がそこにある。それは歴史を通じて連続し、しかも時代のなかで姿を変容して對比される。これがウィーンの伝統的な芸術的意志のあらわれなのである。

私はこの病院へゆき、アム・シュタインホフ教会の前庭に佇んでこうしたウィーンの美しい運